掲載日:2025年01月19日,面名:EA0XX0,記事ID:K2025011900000010900
(C)河北新報社

心のケア 大切さ再認識

能登で支援活動 東北福祉大生が報告会

仙台

能登地震 つなぐ 東日本 阪神

継続の重要性を実感

能登半島地震被災地で東北福祉大生が取り組んだボランティア活動の報告会が、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。学生らが石川県内での活動や感じたことを発表し、心の復興のサポートや、継続的な支援の大切さを訴えた。

活動には、大学の呼びかけに応じた22人が参加。昨年5～9月、4班に分かれてそれぞれ4日間活動した。11日の報告会では各班の代表が発表した。

8月に輪島市や七尾市、穴水町などで活動したグループは、障害者施設での交流などに携わった。総合マネジメント学部1年の葛西和輝さん(19)は「皆さんの笑顔を見て、心のケアの重要性を再認識できた」と振り返った。

9月に穴水町などに入ったグループは、秋祭りの開催を通じて住民と触れ合った。総合マネジメント学部1年の橋本歩さん(18)は「一人一人の心の復興に向けた支援が必要だ」と訴えた。

総合福祉学部4年の菅井万緒さん(22)は、災害ごみの運搬といった活動を通じて被災地外での行動の大切さも感じ取った。「募金活動など、自分なりにできることを見つけて取り組むことも大切な支援の一つ」と話した。

教育学部3年の高野健太さん(22)は現地で広く使われる「能登瓦」の重さが、多くの建物の倒壊を引き起こしたとされることに触れた。「北陸地方の寒さや積雪から身を守るための瓦が被害拡大の一因になった」と現地で得た知識を来場者らと共有した。

学生を受け入れた志賀、穴水両町の事業者とオンラインでつなぎ、学生の継続的な支援の意義について意見交換する時間もあった。

障害者就労支援事業所「ピアサポート北のと」(穴水町)の河元寛泰さんは「活動を後輩にも伝え、今後も被災地に思いを寄せてほしい」と中長期的な支援を期待。学生を引率した石塚裕子教授(都市計画)は「『つながり』をキーワードに、学校全体で今後も支援を続ける」と話した。

報告会にはオンラインも合わせて、学生や学校関係者ら約40人が参加した。

ボランティア活動を振り返る学生